

「夢の構造」

佐々木紺

触れるまで印象の奥の寒菊

夢の構造銀糸かすかにたわみ雪

金貨の女王と見つめあひ冬麗

最新の細胞を載せ冬の皿

friend&enemy 水涸れてゐるあかるさの

寒晴や石に乗る鳥きよらなる

殴られるまへひらく眼や寒卵

襖ひらいて悪い記憶を置いてくる

\* (ここから夢)

ゆびさきで沈める真珠冬立ちぬ

(こころを外してみて ねえ みてよ)

硝子拭くときの口笛白鳥来

(呪いが解けるときのしずくがきれい)

寒鯉のゆらりと父も晩年よ

(夢をたくさんみれば戻れる) (どこに?)

\* (ここまで夢)

袖振れば霞のうごく絵の向う

或いは父方 貌鳥がちらと来て

白躑躅くしやりと抱き潰す手紙

ひとさらふとき春日傘差し掛けて

当て物で奪ふ心やひなあられ

ゆるやかに藤あばら家を浸しゆく

夜をすべるチュールスカートで夏へ

その死後に針刺すことも濃紫陽花

よき墨のさらりと古び蟬丸忌

緑陰のがらりとうらがへすオセロ

ひとばしら淡雪羹のひらかれて

\* (夢)

激怒とは痙攣に似て蟬の翅

(うつつでは怒ることも禁じられていた)

針葉樹あなたを夜が咀嚼する

(スプラインシングされてのこる、いい記憶だけが)

これやこの夢にひらきし青簾

造花の列が引きかへに燃え

白さるすべり眠りにおもかげの沈み

\* (夢)

よく憎んでやる昏睡の白玉

いわひばり集ひ囊てふ字の昏さ

かやつり草燃して家族はただの箱

夕蟬のなかはからつば逐電す

風死してびたと引きあふ弓と弦

夕立や好きなエレベーターの匂ひ

育つ感情 小鳥たち降るやうに来る

白壁や鳶が記憶を移し合ひ

よそゆきの布と身の間を素風かな

波は血のなかをつたはり芒原

柳散る切尖に身を反らしあひ

添水鳴りまぶしきものに恋敵

定家忌の花の喩としてひらく指

秋雪の過ぐ盆の面(も)の黒漆

会ふたびに兆す真葛原のありぬ

\* (夢)

花札の内外(うちと) 雨なるやすらかさ

注射こはくてサテンに雪の香

雪ふりつむ偽史は正史を塗り込めて

黒髪ながれゆく冬の芹

フルーチェの圧やはらかに冬の虹

空をほどいてここまでおいで

\* (夢)

閉ぢられて襖が白いだけのこと

実南天打ちぬけてゆく雨の玉

みささぎに後の幼な牡丹雪

死ねば人若きすがたや鳥の恋

こゑ墜ちて地霊のぼればひばりかな

子猫からタオルへ春雨がうつる

半島を雨がさらつて山葵の芽

白梅や素足でおどるポロネーズ

ゆふぎくから石彫つて魚あらはるる

春深くハーブつまびき変はる指紋

手放しぬ桃源郷を箱に籠め